

放射線科専門医取得コースカリキュラム

1、研修目的

呼吸器および循環器領域の画像診断に関する専門知識と技能の習得を基礎に、放射線診断専門医として、患者および主治医に信頼される医師を目指す。また、新たな臨床研究課題を開拓、遂行できることをめざす。

2、研修目標

当センターは放射線科専門医の修練機関であり、また核医学会の専門医教育病院にも認定されている。当センターの研修プログラムでは、放射線診断専門医、核医学専門医の取得に備えて、実績を積むことを目標とする。

3、専門医資格取得要件

放射線診断専門医

専門医試験の段階で5年以上放射線学会の会員であること。

放射線学会指定の修練機関で、研修を受けていること。

放射線科専門医認定試験を受験し、放射線科専門医となる。その後、さらに2年間修練機関での研修を受け放射線診断専門医試験を受験し、放射線診断専門医資格を得る。

核医学専門医

医師としての経験が初期研修を含んで6年間以上あること。専門医教育病院で5年間以上の研修を受けていること。専門医試験を受験する段階で、核医学会の会員であること。

4、カリキュラムの概要

当センターは236床の循環器・呼吸器疾患の専門施設である。とくに呼吸器疾患は豊富な症例があり（びまん性肺疾患の外科的肺生検約600例など日本でも有数）、肺癌を含めあらゆる呼吸器疾患に対応している。したがって、放射線科学会で定めたガイドラインのうち、呼吸器・縦隔、心・大血管の研修に必要な疾患はほぼ日常臨床のなかで研修可能である。

当センターでのカリキュラムの基本は、CT、MRI、核医学の読影を通じて、呼吸器疾患、循環器疾患の読影の基礎を学ぶことである。また、CT下生検（年間50例程度）、血管系IVR（年間10例程度）などにより、呼吸器疾患のIVRの経験を積む。

外科・放射線科との合同カンファランスを毎週火曜日18時より行い、その後19時から隔週で病理カンファランスを行っている。約2ヶ月毎のVATS症例病理検討会、年数回の画

像診断検討会、年数回のCPCに参加する。とくにびまん性肺疾患の症例は豊富な症例の蓄積があり、病理も含めて実際の症例を多数例経験することができる。

放射線科は研究会・学会活動は積極的に取り組んでいる。研修の間に最低、総会での発表1回、論文発表1本を目指す。研究会・学会活動・論文作成には可能な限り、経済的・時間的援助を行うことを約束している。

なお、放射線診断専門医は、初期研修終了後最初の3年間のうち最低1年間は総合修練期間での修練が義務付けられている。当センターは、総合修練機関ではないので、当センターでの研修は1-2年程度を想定している。(1年以内の短期の研修希望の方は要相談)

5 研修項目

当センターでの研修項目は、日本医学放射線学会のガイドラインにのっとり、呼吸器、循環器疾患において、以下の項目を研修、実践する。

医の倫理を個々の診療行為において実践できる。

放射線診療を行うために必要な放射線の物理作用を理解する。

放射線科診療を行うために必要な放射線の生物作用を理解する。

放射線防護の理念と目標について正しく理解する。

放射線診療において医療の質と安全を確保する知識と対応方法を理解する。

各種画像診断法の原理と特徴を理解し、個々の患者に最適な検査法を指示できる。

画像所見が診断に有力である疾患を、専門医に要求される水準で適切に診断できる。

インターベンショナル・ラジオロジー (IVR) の適応、手技内容、治療成績、合併症、放射線防護について深い知識を獲得するとともに、基本手技を習得する。

核医学の原理と特徴を理解し、臨床情報や他の画像診断と関連づけて核医学画像を解釈し、診療上有用な情報を提供できる能力を修得する。

放射線治療について、(1)放射線腫瘍学総論、(2)放射線腫瘍学各論のそれぞれの領域の知識を習得し、治療の実際を理解する。

6 年度別到達目標

1年目の到達目標

肺癌、COPD、間質性肺炎、大動脈瘤などの典型的な症例の読影レポートが作成できる。IVRの助手ができる。

2年目の到達目標

呼吸器・循環器疾患の読影レポートが作成できる。

簡単な症例で、指導者の監督のもとIVRの手技が行える。

学会発表、論文発表を行う。

7 研修評価体制

指導医により逐次評価を受ける。半年に1度、面談をして目標達成度のチェックや次年度の目標を立てる。

8 研修施設認定

日本医学放射線学会修練機関

日本核医学会専門医教育病院

9 専門医・指導医

常勤医 2 名（放射線診断専門医 1 名、放射線科認定医 1 名、核医学専門医 2 名、PET 認定医 2 名）